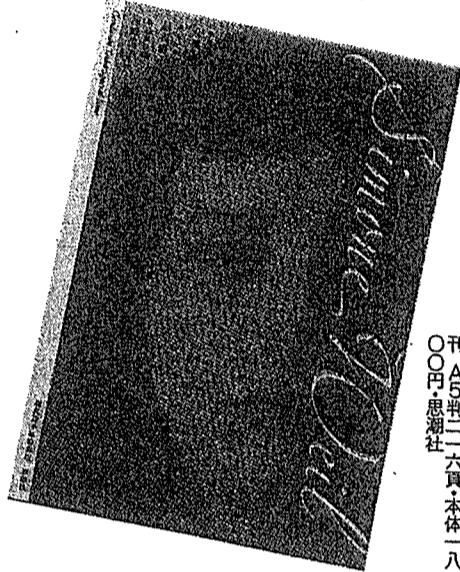


# 生きているウェイユ

言葉が生きるのは、言葉が「言葉ならざるもの」と衝突したとき  
今村純子

IMAMURA Junko



▼今村純子氏責任編集「現代詩手帖特集版 シモース・ウェイユ」  
一時もつこと』(12・25刊)A5判二六頁・本体1,000円・思潮社

先日ウェイユの前半リスト教的闇闇を読みました。それが「言葉が生きるのは、言葉ならざるもの」と衝突したときと思ひておひまじでさあさまな方々のその瞬間と瞬間に衝突する際にほんのほんの火花を見たい」「見せたい」というのが基本的な「セプトです。

ウェイユであつたら、いま、ここにどう考えるのか

——本書では論考、インタビュー、シンポジウムなど、さまざまな角度からウェイユの思想を取り上げています。まずは基本的なコンセプトをお聞かせてください。

今村 私は五年ほど前にウェイユを読んできましたが、彼女はとても強烈な思想家です。それゆえ、彼女の思想に取り込まれてしまうといふのがよくありました。ずっと見つめていると、横顔でも見えなくなってしまうのです。たとえば、ウェイユがプロトーンを解説する際、プロトーンの内面を詳しく論議するほか、読み込んだとしても、それが彼女のテクストは静止したものになってしまふ。ステーザン・シングタクが「反解釈」と語で書いてしまふと、わたしの言葉で書き換えると「ウェイユは生きている」となる。シモース・ウェイユであつたら、まさにどう考えるのか。それを「ウェイユ」というイメージとして捉えて、自分自身の言葉なり、身体なりで表現していきます。

トドケが辻さんなら、掉尾は河野信子さんと十川治江さんの対談の抄録です。これはこうして入れたかった。十川さんは、科学の中で見えてる私を入れてしまつて、科學は崩壊してしまつておしゃっています。だからこそ、それがない、むしろ、どうしてもダメで役立たずで無意味になつていていたんだからこそ、わたしたちは彼女に惹かれるわけで、その「ほととぎす」にロマンクの炎のように赤と美が宿り、それに震わされ、わたしたち自身の生が動いてゆく。そういう関係です。

——翻訳も複数掲載されています。なかでも「無行為の美德」を論じる「クリム童話」における大羽の白鳥の物語」が印象に残りますね。

今村 一六歳のときに書いたこの論考のうち、「シモース・ウェイユ思想全体の廻り」というべきものが見出されま

す。それがウェイユを読むことだと思つてます。むろん、「言葉が生きるのは、言葉ならざるもの」と衝突したときと思ひておひまじでさあさまな方々のその瞬間と瞬間に衝突する際にほんのほんの火花を見たい」「見せたい」というのが基本的な「セプトです。

——書頭インタビュー「詩と哲学を結ぶために」の相手は、辻井継之助です。ウェイユの特集で、経営者・詩人である辻井さんと一緒に持ってきた構成が大胆ですね。

今村 私は偶然性の人間で、だいたい自分の思い通りには何一つうまくいかないのです。だからこそ、ウェイユの必然性の観念に惹かれたわけですが、今回の企画も、一軒三転してしまつて、そうした折りによると「あちら側」から降つてきました(笑)。辻井さんがインタビューを引き受けてくれたときも、彼女は本当にうれしかった。ですから、気付いたときに、もう少しもあるかない必然性になつていただけでした。

——あの日本では、「日本語が生きていらない」と辻井さんはおっしゃっていますね。「おフランス」の言葉を話しても、それは「いま、ここ」の現在とは無関係なわけです。だからこそ、労働者や芸術家といった、「生きる」言葉を必要としている人たるウェイユは説まるのだと思います。その言葉で何かをしようとするのではなく、むしろその言葉に突き動かされて、その言葉全体から離れるところとが言葉の使命だと思います。

辻井さんが、ケルト人は文字を持てて恩を持てたけれども、文字を持つことの怖さを知つてから持たなければならぬものを表現するのだと、うつが時々いるけれども、そもそも世界の九十九パーセントは言葉にならぬものからなっている。そこそこ「ウェイユは、ものすごく真剣に考えていたと思います。

トドケが辻さんなら、掉尾は河野信子さんと十川治江さんの対談の抄録です。これはこうして入れたかった。十川さんは、科学の中で見えてる私を入れてしまつて、科學は崩壊してしまつておしゃっています。だからこそ、それがない、むしろ、どうしてもダメで役立たずで無意味になつていていたんだからこそ、わたしたちは彼女に惹かれるわけで、その「ほととぎす」にロマンクの炎のように赤と美が宿り、それに震わされ、わたしたち自身の生が動いてゆく。そういう関係です。

——翻訳も複数掲載されています。なかでも「無行為の美德」を論じる「クリム童話」における大羽の白鳥の物語」が印象に残りますね。

今村 一六歳のときに書いたこの論考のうち、「シモース・ウェイユ思想全体の廻り」というべきものが見出されま

す。この事態はウェイユの「不幸」の觀念に直結します。

「不幸な人」は、言いたいことが沢山あるのに何も言えない。なぜなら「恥ずかしい」からです。「恥辱」が

言葉を押しのめてしまふ。社会から放逐されることで人々から見捨てられることで、それが、わたしたちの生きる世界に対するアランダージーの力で抵抗する

ことを、自分の方でほんの少しでもしない必然性との接觸とも表

現をしますが、最終的には、必然性と「同意すること」以

外にはわたしたちの自由はない、と転じてきます。「六羽の白鳥の物語」に出てくる兄たちを田舎へと変えられて

しまった妹は、兄たちを救つため、六年間の沈黙を強いられます。この事態はウェイユの「不幸」の觀念に直結します。

「不幸な人」は、言いたいことが沢山あるのに何も言えない。なぜなら「恥ずかしい」からです。「恥辱」が

言葉を押しのめてしまふ。社会から放逐されることで人々から見捨てられることで、それが、わたしたちの生きる世界に対するアランダージーの力で抵抗する

ことを、自分の方でほんの少しでもしない必然性との接觸とも表

現をしますが、最終的には、必然性と「同意すること」以

外にはわたしたちの自由はない、と転じてきます。「六

羽の白鳥の物語」に出てくる兄たちを田舎へと変えられて

しまった妹は、兄たちを救つため、六年間の沈黙を強いられます。この事態はウェイユの「不幸」の觀念に直結します。

「不幸な人」は、言いたいことが沢山あるのに何も言えない。なぜなら「恥ずかしい」からです。「恥辱」が

言葉を押しのめてしまふ。社会から放逐されることで人々から見捨てられることで、それが、わたしたちの生きる世界に対するアランダージーの力で抵抗する

ことを、自分の方でほんの少しでもしない必然性との接觸とも表

現をしますが、最終的には、必然性と「同意すること」以

外にはわたしたちの自由はない、と転じてきます。「六

&lt;p

の力)について社井さんがが確なことをおしゃっていました。核兵器を使いたいというのは想像力を失った人間じゃなきやできないけれども、核兵器を創造するといふのまだは科學者の想像力が不可欠である。ど、實際、ウェイクは想像力という言葉をよい意味で使うことはあります。彼女は「偽りの想像力」という言い方をするのですが、それは「遠近法の錯覚」のことだ。物理的にも、心情的にも、自分に近いものがよく見え、遠くのものが遠らいでしまうその錯覚を、眞実と取り違えてしまつといふことだ。これと「眞の想像力」とは全く別のものですね。「労働者に必要なのは美であり、詩である」とウェイクが述べる意味は、今の労働を嫌う怒りや「アフターラー」が樂しきればそれでいいじゃないと、いつのまにか、「労働現場のものが詩に満たされなければならぬ」といふことだ。だから、「労働現場イメージ」と書く換えたのがあると思ひます。

——ウェイク博士、ウエイクさんは何回も年々、実際に巡回をしています。「親族の基本構造」(青弓社)執筆の際に、数学者であった兄のアンソニーの助言も役立ちましたね。この両者の共通性は甚めに感じます。

今村 一人のものと感覚性の強い時期が、両大戦の「戦闘期」にあたります。世界が醜態を一邊倒に染め「びられ」の方向に向かっている。そういう時期で「わたしが確かにわしたじである」たぬ、「わたしながむもの」のほうに向かう心性が「人と共通しています。ウェイクが労働者の娘であれば、工場に入るとはなかつたでしよう。ブルジョワや西洋やヨーロピードいた自分の属性が自分がほんと感じてしまふ。どうもほんの少し出なければ自分が自分でなくなってしまう、と動かすにはいられなくなつてく

ウエイエト懸想が花開くか否かの  
鍵は、どう“生かすのか”

思想家という点での振幅はさうなのでしょうか。つまに初期には労働の問題を考へるといふからはじまり、後期は神秘的な方向へ進んでいったように見えます。と同時に一貫した思想家と言えるよな氣もします。

今村 十代に書いていた論考と最晩年の神秘思想との間に一貫性があり、なつかつ普遍性があります。しかし「十代に書いた『現生活の経験』をほんと二十代前半と、後半および三十三歳までの経験とを比べると、後者のほうが思想そのものは研ぎ澄まされたものですが、その一方で現実認識はむろん前に前者のほうが鋭いのです。たとえば、仏学者の片岡美智子さんは『シモース・ウェイユー—眞理への献身』(講談社、一九七一年)で、「ニューヨークに渡る船でウェイユーがたった数回しかない椅子をずっと占拠して書き物をしていたエジソンや、この時代もっとも不幸であったのはユダヤ人であつたばかりはながったのか」と、現実認識のあまりの甘じたつづり書いていらっしゃいます。

The image shows the front cover of a book. The title '前キリスト教的直觀' (Pre-Christian Intuition) is written in large, bold, vertical characters at the top. Below it, the author's name '今村紹子' (Kondo Showko) is also written vertically. The central part of the cover features a black and white photograph of a classical building with four columns and a triangular pediment. At the bottom of the cover, the text 'この世界の底に流れん' (Flowing at the bottom of this world) is visible.

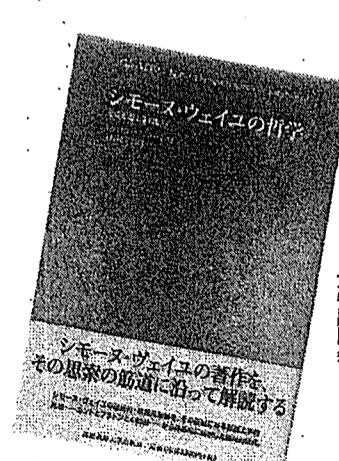
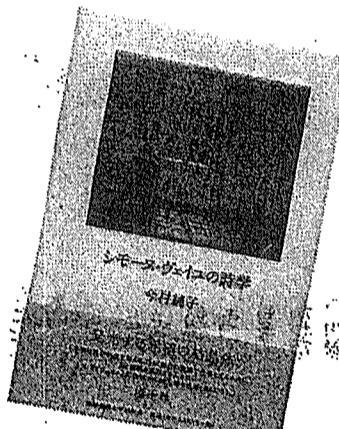


今村義子氏の著訳書

志による自由が探究されてくるのですが、「工場生活の経験」以後は、意志が打ち碎かれたあの欲望による自由の探究へと移行してゆきます。(ま)、必然性に同意するところを「欲望する」とこういふので、 「不在の神」への靈といふことになります。

カエイコはたった四年の生を紡いだ人です。彼女の文章は象徴性が高く、問題闘争は多岐にわたる一方で、未完成や矛盾をはらむのは避けがたいことであるかと思います。その思想をじつうわしたちが受け取ってゆけるのか。本書にかかるひくべきした方々のカエイコの捉え方そのものは、ほぼ一致していると思います。解説が多岐にわたる類の思想家ではないです。しかしその捉えたものをどう表現するのか、どう「生かすのか」は手差別的で、こういふ、ウェイコの思想が花開くか否かの鍵があると思うのです。

立ち上がりトシキルヒトがよくある事で、内的な動気がどうしても身体を出してしまう。それがやれやれの原因家です。これがやるべき仕事の一つだ。カヨウがいたんだと」「行為したこと」ではなく「語らなかつた」と「行為しなかつた」と、浮き彫りにする心地よいのが、けられるかと思います。例えば彼女が懸念する「一チエ、百科全書派、量子論、ユダヤ性」といったものには、間違なくなつて、カヨウその人の姿が一重申しながらあります。これを浮き彫りにすることは言葉そのものの、思想そのものの、聞いていいものもあると感します。あるいは河野さんの言葉借りれば、「恋愛沙汰を一度も起こしたいため、カヨウのエロスについて、神となければ付き合えないような口टいていて、著縦することも興味深いですね。個人的な恋愛として、「シモース・ウヰーツ」と「美術」、とか、「シモ



參考文獻

を描いてみた。カーリーを読むより自然に出来て、出来た自分がハインツレーナーの絵がいい。シギーワルト・ウェイクという人は、やうした書を手であると思ふ。(ト)

卷之三

卷之三